
8つのココロ

神山紗樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8つのココロ

【Nコード】

N2554V

【作者名】

神山紗樹

【あらすじ】

咲恵は彼氏の龍華を亡くしたために、自殺する。

しかし、咲恵が死んだ先はもう一つの世界で彼女の運命が変わる。

そして8人のココロの変化と複雑な恋模様です。

私が死んだ理由（前書き）

恋愛もの×SF中心で行こうと思っています。

SFは初挑戦なのですが、がんばっていききたいです。

私が死んだ理由

「咲恵ーそんなところでなにやってんの？」

不気味な赤茶色に染まる背の高い病院の上。私は、空を見つめるようにして手の上からこぼれおちそうなほどの粒をただただ流していた。

まるで川の流れのように滴り落ちるそれを光に照らして。

ずっとここから動きなくなかった。ここから動き出してもココロを奪われた私になんの意味があるのだろう。そんなことを繰り返しながら15分。でも、髪を乗せて運ぶ風が体の表面から頭の中に入ってきて気持ちが悪かった。

ここまで落ち着いたのに私のココロは失われたままだった。

スツとまた風が木の葉を揺らす。

その瞬間、何かが私を突き動かすかの様にあれほど動きたくなかった体がゆっくり進んでいった。柵なんてまたいだことも忘れてその淵にいつの間にもやら立っている。

遠くのベンチから声を掛けていた七海が異変に気づいて動くと同じ時にベッドに飛びつくような形で飛び降りた。

「はっ、咲恵ー!!!」

涙交じりの声が私の頭中に駆け巡った。

私の身体がアスファルトに着いたのはそれからほんの一瞬の出来事だった。

私は、死と直面したんだ。

龍華は、私の彼氏だった。龍華って言う名前は少し女の子っぽいなど思っただけれどすごく優しい人だった。

「〜だった」って言えば過去形になってしまうけれど先日まで生きていたんだ。

彼の母はもともと数年前に病気で亡くなり親戚と暮らしていた。

彼は、まだ中学2年だったらしいのだが、そんなのにも負けずに普通のと同じ生活をしていた。

彼は母がいなかったせいなのか少々暗い性格。

私はそんな彼が好きになった。もちろんそんな暗くて一人でいるような奴を好きになるなんてそんな人なんて私位だったし、付き合い合っている人なんているはずなかった。

付き合い始めて数日。

彼が私の母を見かけた時、小さく涙を浮かべていたんだ。

私は本当は強い人が好きだったし、泣く人なんてって思ったけど何故かその時だけは許せた。

その日から彼が変わったような気がした。

私の母を見かけたっていう普通の人ならどうでもいいような出来事で彼は変わった。

それから3カ月が経ち、幸せと呼べる日々が続いたと思った日。

彼は、いきなり倒れた。

病院で彼の親戚から伝えられた事実は、母親を同じ病気にかかったという事と残り少ない命だという事。

そんなこと彼は何にも知らずに、鈍感な彼はそんなことは気づくはずはなかった。

その2ヶ月半、病室で彼が苦しそうにしているのを私が見つけてしまった。

そして、彼は私の前で死んだ。

だから私は自殺した。

今、こうやって振りかえっているのも死んでいる心地がしていない。まるでまだ死にきれていないようなそんな感じがする。

なんか私って心残りがあるからかな？

幽霊になって生き返れそうな気がした。

疑問の人生のスタート(前書き)

がんばって、やっていこうと思います。はい……。

疑問の人生のスタート

「ネエちゃん。今何時だろ〜ね」

私の耳元で声があった。幼い男の子の声……ってあれっ、私死んだよね。じゃあなんで耳があるのさ？と自問自答している

「もう、起きないんだっいたら引きづり回してやる」

「っちよつとやめてよ！」

男の子が布団を取ろうとした途端にボタンと飛びあがった私。

しかし、縦長で全身が入る鏡に映される自分の姿に度肝を抜いた。今までの茶色に染まった髪の毛がウソみたいなイカ墨の色をしてるし、目がパチクリ二重になってる。

明らかに今までの自分と違う。

「あーっ、ネエちゃんが自分を鏡で見てニヤけてるう」

そんな言葉が横から騒音のように聞こえるために鏡から視線を逸らしてみると横にはきつれいにシワやシミもなく掛けられたセーラーが目についた。

「早く行かんと学校遅れる」

とつさにこんな言葉を思いつくとはさすがうち。とか思いながらもじやまな弟君（多分）を部屋の外に追い出すと、セーラー服の線が2本のこと気がついた。つまり私は中学生に生まれ変わったという事になるし、それに付け加えて左胸についているポッケの中の学生証によると、フウライカリン風来花梨という立派なお寺さんの子供かっていう名前と川端中の3年5組と書いてある。

部屋のカレンダーにもよると7月のセミがうるっさい時期が判明した。

可愛いセーラー服ね、わたっしも可愛いなあ。（なんとなく想像で花梨になりきり中）

しかし、その場のぎな行動はいいのだが、中学へ行ったらどうするの？ それよりももっと大事なのがここはどこなの？ っってい

う状況のことであつた。

全く、記憶喪失みたいなのだが言っておくが前の記憶は十分有るし、自分の存在は分かつていたつもりなのだが、先ほどまでの数分間で私は、咲恵 花梨に変わってしまったという事が分かる。

でもこれ以上考えても結論が出る訳もないために私は、そこで思考回路を止めてそこにあつた学生鞆を手に取りのんびりリビングへ到達した。

「パン焼けてるわよ、早く食べないと遅刻するよ」

優しい声にふと振り返るとまるで仏さまオーラが漂うのような母親と思われる人物がいた。

「分かつた行つてきまーす」

そう言うのと傍らにあつたこんがりと焼けたバタートーストを口にくわえて玄関へ行つた。が、しかし戸を開けた瞬間に目の前の電柱にもたれかかるロン毛茶髪のいかにもチャラそうな美少年がまるで雑誌のモデルの様に立っていた。その時私は、誰か分からずに戸惑っているとその少年が

「うわっ、花梨はついに昭和の少女マンガスタイルで登校かよ。ウケルね」

明らかにバカにした上から目線の少年に頭にきた私だったのだが、さすがに冷静沈着に口にくわえていたパンを頬張るとまたまた見知らぬ少女が。

「おっはよう。今日も和君は元気いっぱいですねえ（笑）」

何というか、日本語の小文字ばかり使っていて少々ぶりっこぽい少女だと思つたのだが、長い黒髪に先だけ巻いた形跡もあり、メイク少しケバイ。それに前で鞆をもつていかにも可愛い子にも見えるのだが以外に小悪魔ぽいかもしれない。

「涼ねっ、今日家庭科の料理があるの忘れて家にケーキわすれて来ちゃった」

「また涼はドジだな」

という平凡な会話をしているのを聞いていたのだが、ん？ と引

つかかった。

「ねえ涼ちゃん。ケーキ自体を忘れたの？」

「ええ、うん。そうだよ」

おかしくねえか？ ケーキを持ってくる学校なんてそうそうないぞ。

まさか、この涼って言う子。天然なのか？ でも、それを普通にドジっ子だけで済ますこの和君もおかしいだろ。

ここは、変人が集まっているんですかー！？

まあそんなこんなしているうちにちに遠くから自転車で登校する少年の姿が目に入った。まあ遠目なのだが見た目からして和君とおっしゃる者とは違い清楚系の黒髪の少年であった。

「わりいな。弟の世話で手間取って遅刻した」

「さすが良い兄貴だね！」

と和君が褒めると歩きだしたのでそれに釣られて私もうしろについて行った。

少し歩くといきなり歩みをとめた。

「まただな」

黒髪少年が足を止めて後ろを振り返ると、さっき私たちがいたぶつとい電柱の後ろにまるで幽霊の様な制服を着た男子がこちらを覗いている。

「っ、きゃあー」

私はその男子の異様な雰囲気思わず叫ぶとそいつは、私たちを追い抜かしてすごいスピードで駆けて行った。

「今日は、花梨のお手柄だね。涼のストーカーも今ので懲りてほしいんだけどね」

「涼ちゃんストーカーされてるの？」

私が聞き返すと涼ちゃんと和君がギョロつと不思議な顔で見ているし、やばいこと聞いちゃったかも。

「あれっ？ 花梨その事知らなかったっけ？」

和君は私がつていうか花梨が知っているはずの事を聞き返したためにこちらに訪ねてきている。どうしようと思つた時。

「花梨つてポーっとしてるから分かなかつたんじゃねえの」
思わぬ助け船に私は胸を撫で下ろした。

隣にいた助け舟の船員の黒髪少年は何食わぬ顔で呆然としている。まさに男としては、かつこいいねえ。

「あつそうか。花梨はいつもポーっとしてるもんな。まあそういうところが可愛いんだけどね」

そういつた和君を横目に見ると悪そうな顔でニヤニヤしてる。今私はチャラ男の本領発揮した姿を見たような気がした。まあこんなものは毎日の日課で、すとか言う感じで背筋がゾツとした。というものの私は怖かつたというより驚いた。

しかし、そのお隣さんでそれより怖い視線を送っている人物に気がついた。

「ああごめん。興樹^{「ユウキ}、お前の彼女をとろうなんてこれっぽっちも考えてないから安心しろよ」

とか言いながらあきれ顔でこちらを見た。それと同時に尖つた目つきで興樹も私の顔を睨みつけた。

その瞬間になんで私が悪いみたいになるのさ！　つと内面ではブチまけていたのだが満面の笑みを自分なりに作つた。が、少々引きつた笑みだつたかもしれないとあとから思つた。

疑問の人生のスタート（後書き）

第2話を書き終わったところですが、少々手が疲れてしまいました

（笑）

一気に書き上げたからかな？ と分かりました。

次の展開が…少し焦ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2554v/>

8つのココロ

2011年8月8日03時36分発行